岡山県医師会女医部会報　創刊号

女医部会会報“創刊号”発行に寄せて

岡山県医師会長　小谷　秀成

この度，“女医部会会報”を発行されることになり，小山武子会長さんをはじめ会員の先生方に心からお慶び申しあげます。

日本医師会が4年前に女性会員懇談会を立ち上げ，女性医師にかかわる様々な問題について検討してまいりましたが，岡山県医師会でも2年前に女医部会を立ち上げ主として部会役員と県医師会の間で懇談の機会をもってまいりました。そのなかでわかりましたことは，予想していたことではありますが，結婚，出産，育児，休職，再就職，研修など男性医師に比してかなり心身の負担が大きいことであります。20世紀の終りに「男女共同参画社会基本法」が成立しましたが，そのようなことが法律化される以前から女性医師の方々は，長年苦労されながらも男性医師と対等に仕事を続けてまいられた実績があります。

しかし，もっともっと働きやすい環境が整備できれば，男性医師と同等に医療活動もできるし，医師会活動にも積極的に参加できる，医師会役員にも立候補する，公的な役職も果たせるのではないかという話が女医部会の懇談会に出ていました。もっともな話で，今後，こうした課題を女医部会としても積極的に取り上げ，少しでも前進させていかなければなりません。そのためには県医師会としても出来るだけの支援を行いたいと思っています。

いま，女性医師の占める割合は15，6％と云われていますが，今日の女子医学生の数から云って，近い将来，女性医師が4割以上を占めてくるのも時間の問題です。そうした時代を迎えるためにも，男性社会からなだらかに男女共同参画時代に推移していく必要があります。そうでなければ，医療界は一般社会や国民感覚から外れた閉鎖的な社会になる心配があります。

ところで，今日，健康への関心の高さは，かつてなかったほどでありますが，国民の健康教育は必ずしもうまくいっていないように思います。そこで，生活概念の視点をもった女性医師のしなやかな目に大きな期待がかかっていると云っても過言ではあ

りません。母親，主婦，嫁といった役割をもてばなおさらで，女性医師は国民の健康教育に大きな役割を担っていただけるものと考えます。

一方，女性医師は，診療に，家庭に，或いは自分自身のことで，忙しすぎて社会性に欠けるという批判が一部にありますが，医療の世界がこれまで男性支配の強い社会であったからと思います。しかし，これからは，女性の柔軟な生活概念の視点を入れて変えていく必要のあることを痛感しています。

今日の日本社会は申すまでもなくいろいろな危機に瀕していますが，これを救い，新しい社会をつくる力になっていただくために，診療室以外においても女性医師の方々のご活躍をご期待申しあげている次第です。

女医部会報の発刊によせて

高梁医師会長
岡山県医師会女医部会副会長　池田　元子

いつしか冬の訪れを感じる候になりました。

皆様方にはいかがおすごしでいらっしゃいましょうか。

お元気で日夜診療に従事されていらっしゃいましょうか。また，ご家庭でお子様のご成長を楽しみに幸せな日々を送っていらっしゃるでしょうか。

女医部会では先生方に，私たちの行っている活動の様子を広くお知らせしたいと思い，このたび広報誌を作成しました。

ご家庭にあって，医師としての第一線から身を引かれてお過ごしの先生方も今一度，現場で医療活動をなさいませんか。その時のご参考になればと，詳しい条件等をお知らせできるドクターバンクも設立しようと，会長の小山先生を中心に意欲を燃やしております。

医学は日進月歩。すばらしい進歩を続けております。社会も，世情も，また変わっていきます。それに遅れないように私たちも学習していかなければならないと思います。女性の視点で，医師会をそして社会をしっかりと見つめ，女性でなければできない働きをしていきたい。そのためにもいろいろなことに挑戦し，勉強していかなければならないのではないでしょうか。

皆様方のご協力のもとに，女医部会を発展させ，私たち女性医師の活動の拠点にしたいと思います。ご協力の程お願い申しあげます。

県医師会で「女医部会」を担当して

岡山県医師会理事　山崎　善久

岡山県医師会理事に平成12年４月に就任して以来，16年４月から３期目を迎えております。２期目から「女医部会」の担当になり，12月の各種委員会で，平成14年，15年と「女医部会」の先生から御意見を聞かせていただいております。平成14年11月に小山先生からいただきました岡山市医師会女性会員あての文章が「女医部会」発足の主旨と思っております。「研修，研究に充実した日々を送る筈の時期に出産，育児などを契機に医業を辞めざるを得なくなることのないよう，少しでも支援できるシステムづくりは出来ないか，又，復職が少しでもスムースにいくため，ワークシェアリング，ドクターバンクなどが，現実問題として，機能できるものか，検討したい。」との内容でした。又，女性医師は時間短縮勤務制度より，保育所の充実，産休，育児休暇体制の整備を期待しており，保育の充実を求め，安心して仕事に打ち込める環境づくりを要望しているとされています。県医師会でも16年４月よりドクターバンク事業が開始されましたが，産休，育児中の代診医が確保出来る様，ドクターバンクの雇用対策事業の拡大に期待が寄せられています。今年の９月上旬にドクターバンクと女医部会の関係者で話し合いが行われ，女医部会は潜在医師の発掘を積極的に行う事，求人医療機関・休職医師のドッキングをドクターバンクで実施する事が確認されました。女性が医師国家試験合格者の30％に達する状況の昨今，女性専門外来とかの名目で，女性は女性が診るのだという風潮が大きなものとなって来ますと，男性卒業者が産婦人科へ入局しにくいという状況が出てくる可能性があります。産婦人科に限った事ではなく，女性医師が増加しますと，産休，育児休の女性医師の仕事を男性医師が引き受けねばならない事になります。男性医師の過重労働が問題になって来るのではないかと心配致します。今後は新しい時代にふさわしい「子育て」環境の整備が必要になると思われます。対等な立場で問題解決にあたる様にしなければと思います。失礼な事も書かせていただいたと思いますが，その点はどうぞお許し下さいます様お願い致します。

女医部会の今，そして　これから

岡山県医師会女医部会会長　小山　武子

平成14年８月，岡山県医師会の女医部会が発足しました。「今さら，女医部会なんか。」「何のために？」との声も聞かれました。

現在，医学部卒業生の女子学生の占める割合は，年々上昇し，2020年には50％に達すると推測されています。これに伴い，女性医師の役割も大きな比重を占めることになり，又，女性医師が増加することで生じる諸問題は，医師全体の問題となると考えられます。

女性が医師になって，研究，研修にと最も大切な時期に出産，育児などの長期休暇を余儀なくされ，その後，職務の特性から，仕事に対して情熱を持ちながらも，心ならずも退職，休職，転職へと，仕事の中断を余儀なくされています。

最近，政府においても，積極的に「仕事と子育ての両立支援」による種々の制度が施行され，また，保育所の増設，増員，延長保育など，徐々に行われつつありますが，まだまだ不十分です。ではありますが，行政の行う制度に頼らざるを得ないのが現状です。将来的には個々の病院での保育施設の充実等が，病院評価の一端となると思います。現在女性医師の勤務環境についても，全国的に見ても，病院，医局などで，かなりの格差があるようです。

今年より，卒後臨床研修制度の変革により，ドクターバンクの事業内容の転換が求められ，期待されていると思われます。医師会未入会の医師，特に出産，育児，その他の事由にて，常勤はできないが，ワークシェアリング，オンコールワーカー，パートタイマー等での勤務体制があれば，勤務可能な医師を，種々の方法にて，ドクターバンクに登録できる様，又，求職申し込み登録の簡素化などで，より多くの情報が伝わりやすくなるシステムの構築ができればと望みます。

将来の大きな問題として，クローズアップされている少子化問題，介護問題，性差医療における女性専門外来など，女性医師が，女性のしなやかな視点で，積極的にこれ等に関わり，活動することが求められる所であると思います。会員，非会員に関わらず，できるだけ多くの女性医師の声を女医部会へ届けていただき，女医部会の活動のあり方を模索したいと思います。

岡山県医師会女医部会委員

会　長	小山　武子	（岡山市）	江澤　香代	（倉　敷）	道満　初音	（赤磐郡）
副会長	中島　道子	（岡山市）	吉村　友江	（児　島）	内田　久子	（邑久郡）
副会長	清水　順子	（倉　敷）	守屋　靖代	（玉　島）	田中　通子	（浅口郡）
副会長	池田　元子	（高　梁）	河口　礼子	（玉野市）	白岩　美咲	（真庭郡）
	神崎　寛子	（岡山市）	宮島　裕子	（笠　岡）	山下佐知子	（勝田郡）
	深田　好美	（岡山市）	山本　裕子	（吉　備）	菊池　了子	（英田郡）
	木庭　明子	（西大寺）	菅波　知子	（御　津）		